



ばれます。とても格調高い言葉で語られる一方、内容は血沸き肉躍る系の冒険モノ。主人公たるや、空を駆け地中を潜るスーパーマンで、その憑き神は鱗から火を噴く巨大な竜！しかも一目見ただけであらゆる女性が恋に落ちるといって超美形で、戦で命を落とした彼を蘇らせるのは強い霊力を持った美少女たち——娯楽性の強いこの物語をアイヌの人たちは心から愛していました。



本田優子  
(札幌大学教授)

西南部ではユカラと呼ぶ物語は、北海道の少年英雄が大活躍

今月のテーマ  
ユカラ  
— 最期に聴きたい物語 —

Vol.81

ゆうこみゆき

なるほどアイヌ文化エッセイ

ソノコ de ソノコ



アイヌ文化のことをもっともっと話したい！  
本田優子と村木美幸の二人が、  
その魅力を交代で執筆する  
ソノコ(=お便り)形式のエッセイです。



イラスト／莊田悠人

アイヌ社会では、ユカラの語り手は「ユカラクル(ユカラをする人)」と呼ばれて尊敬を集め、とりわけ高名なユカラクルの名は遠く離れた地にまで鳴り響いたとのこと。たとえば、旭川出身の砂沢クラさん(二八九七〜一九九〇)のご主人の伯父さんは、あちこちから呼ばれて村から村へと渡り歩き、子どもがみな大きくなるまで家に帰らなかつたんです。また、沙流川下流域出身の平賀サダモさん(二八九五頃〜一九七二)のおばあさんは、百歳近くになつてもお迎えに来た馬車に乗つて新冠や静内に出かけ、集まった人たちにユカラを語り聴かせていたとのこと。



サダモさんご自身も有名なユカラの語り手だけど、私はサダモさんが語られたというあるエピソードが忘れられないの。それは、彼女のユカラを聴いた旭川の人々が、死ぬ前にもう一度ユカラを聴きたいと言つたので録音を聞かせたところ、「いいなあ」と言いながら目をつぶつて亡くなつていったというもの。なんだか本当に衝撃を受けました。実は、人が亡くなつたらその枕辺でユカラが語られ、死者の心残りがないように物語の最後まで語り終えなければならぬということ。「アイヌ文化の基礎知識」の一つでも私はそれを、お葬式で行うべき作法としてなんとなくマニュアル的にとらえていたような気がする。でも、そうじゃなくて、ユカラは本当にアイヌの人たちが最期に聴きたいと願う物語であり、アイヌ社会での物語ってそこまで大切なものだったんですね。

あなたには、人生の最期に聴きたいと願うような物語がありますか？



次回のテーマは「アイヌメン・イクマの霊送り」  
村木美幸(アイヌ民族文化財団理事)が担当します。

